

高等学校学習指導要領改訂における
科目「体育」（入学年次の次の年次以降）
学習評価の事例研究について

令和6年3月

令和5年度県立高等学校教育課程課題研究

「保健体育研究班」

目 次

「指導と評価の計画」に基づく学習評価の事例研究

科目「体育」【入学年次の次の年次以降】

B 器械運動	1
C 陸上競技	9
D 水泳	19
F 武道	25
参考文献	31
班員名簿	32

学習評価は、「生徒にどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、私たち教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためのものであり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められています。

新しい学習指導要領が年次進行で実施されて、今年度で2年目を迎えました。学習評価については、令和元年6月に国立教育政策研究所から『学習評価の在り方ハンドブック』や令和3年8月に『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料高等学校保健体育』が発行されています。

また、県教育委員会からも様々な通知や手引き、研究発表等で評価方法について発信されていますが、各学校におかれましては、実際の学習評価に苦慮している現状があると推察いたします。

本研究において、昨年度に実施された学習評価に関する研究を継続し、より具体的な授業内容や評価方法の事例を示すことで、各学校が適切な授業や学習評価の一助となることを願っています。

【B 器械運動】

1. 指導と評価の計画

	知識及び技能	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
単元の目標	次の運動について、技がよりよくできたり自己や仲間の課題を解決したりするなどの多様な楽しさや喜びを味わい、技の名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、発表の仕方などを理解するとともに、自己に適した技で演技することができるようになる。 ア マット運動では、回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに安定して行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを構成し演技することができるようになる。 生涯にわたって運動を豊かに継続するための自己や仲間の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようになる。												
0													
学習の流れ	技の試技と説明												
	試技により動きの基礎を学ぶ												
	技のポイントカードを学習カードにまとめる	知①	知②	知③	技①	技②	思③	技③				発表	
40													
50													
評価機会													
	知												
	技	①	②										
	思	①		②					③	②	③	③	
	能									②			③
共通メニュー（整理運動、振り返り等）													
評価	知												
	技												
	思												
	能												
単元の評価規													
	知												
	技												
	思												
	能												

単元の評価規	知	①器械運動の種目によって必要な体力要素があり、その種目の技能に關連させながら体力を高めることができることについて、言ったり書き出ししたりしている。											
	技	②課題解決の方法では、自己に合った目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、演技や発表を通して学習成果の確認、新たな目標の設定といった過程があることについて、学習した具体例を挙げている。											
	思	③自己の能力に合った技で組み合わせたり、異なる技群で構成したりするなどの発表に向けた演技構成の仕方があることについて、学習した具体例を挙げている。											
	能	④新たに学習する基本的な技の一連の動きを滑らかに安定させて回ることができる。											
単元の評価	知	②開始姿勢や終末姿勢、支持の仕方や組合せの動きなどの条件を変えて回転することができる。											
	技	③学習した基本的な技を発展させて、一連の動きで回転することができる。											
	思	④課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見している。											
	能	⑤練習や演技の場で、自己や仲間の危険を回避するための活動の仕方を提案している。											
単元の評価規	知	③体力や技能の程度、性別等の違いを超えて、仲間とともに器械運動を楽しむための調整の仕方を見付けている。											
	技	④器械運動の学習に主体的に取り組もうとしている。											
	思	⑤自己や仲間の課題に応じた練習計画を見直すなど、互いに助け合い高め合おうとしている。											
	能	⑥危険の予測をしながら回避行動をとるなど、健康・安全を確保している。											

※ 網掛けは、事例研究該当箇所。太枠内は、昨年度からの追記箇所。

2 指導と評価の具体例

(1) 「知識」を学習カードから評価する

<p>評価規準 知識②</p> <p>課題解決の方法では、自己に応じた目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、演技や発表を通じた学習成果の確認、新たな目標の設定といった過程があることについて、学習した具体例を挙げている。</p>
--

実現状況	判断の目安	生徒の回答例
十分満足 (A)	課題解決では目標と課題の設定、練習法、成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、学習した内容を具体的に記述している。	<ul style="list-style-type: none"> ・後転の勢いをつけられるような練習方法を選択し、他者の観察などで出来栄を確認している。また、後転倒立ではタイミングよく肘を伸ばして体を持ち上げることを次の目標としている。 ・後転倒立では後転の勢いを保ちながら、足を真上に蹴り上げ、タイミングよく肘を伸ばすことができる。倒立した瞬間から顎を上げ、床をしっかりと見ることができている。
おおむね満足 (B)	課題解決では目標と課題の設定、練習法、成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、学習した内容を記述している。	<ul style="list-style-type: none"> ・後転倒立では、回転後の倒立が不安定なので、タイミングを合わせられるように工夫しており、安定しはじめてから一連の動きを練習している。 ・後転倒立では足を真上に蹴り上げ、肘を伸ばすことができる。
努力を要する (C)	課題解決の過程について、学習した内容を記述していない。	<ul style="list-style-type: none"> ・後転倒立ができるように練習している。 ・後転の途中で倒立をする。肘を伸ばすようにしている。

(2) 「技能」を観察から評価する

<p>評価規準 技能①</p> <p>新たに学習する基本的な技の一連の動きを滑らかに安定させて回ることができる。</p>
--

実現状況	判断の目安	生徒の状況
十分満足 (A)	学習した全ての技について、一連の動きをより滑らかに安定させて回ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 伸膝前転、伸膝後転のどちらも立ち上がるまで滑らかに安定してできる。 伸膝前転は足を前に投げ出して勢いをつけて前屈して立ち上がるまで滑らかに安定してできる。
おおむね満足 (B)	学習した技について、技の一連の動きを滑らかに安定させて回ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 伸膝前転又は伸膝後転で滑らかに安定して回ることができる。 伸膝前転又は伸膝後転で勢いよく回転した後、立ち上がることができる。
努力を要する (C)	学習した技について、技の一連の動きができない。	伸膝前転、伸膝後転の動きが安定していない。またはできない。

(3) 「思考・判断・表現」を学習カードから評価する

<p>評価規準 思考・判断・表現①</p> <p>課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見している。</p>

実現状況	判断の目安	生徒の回答例
十分満足 (A)	課題解決の過程を踏まえて、自己や多くの仲間の新たな課題を、適切に発見することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 開脚前転では勢いよく回ることを意識すると膝が曲がってしまうため、膝が伸びているけれど勢いがなく立ち上がれていない仲間と一緒に練習し、お互いの課題を克服する。 開脚前転は、足先を振り下ろしながら開くことで今より回転力が上がり、スムーズに立ち上がることができる。

おおむね満足 (B)	課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・開脚前転で勢いよく回れるようになったが、開脚の時に膝が曲がってしまうことが課題である。 ・開脚前転は、勢い不足で立ち上がれていないので、回転力を上げる。
努力を要する (C)	自己や仲間の新たな課題を発見することができない。	<ul style="list-style-type: none"> ・開脚前転は膝を伸ばす。 ・開脚前転は速く回転する。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」を観察から評価する

<p>評価規準 主体的に学習に取り組む態度②</p> <p>自己や仲間の課題に応じた練習計画を見直すなど、互いに助け合い高め合おうとしている。</p>

実現状況	判断の目安	生徒の状況
十分満足 (A)	課題に応じた練習計画を何度も見直すなど、繰り返し互いに助け合い高め合おうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も仲間の練習を観察してアドバイスするなど、協力して新たな練習法を考えたりしている。 ・繰り返し仲間と学習カードを確認しながら、意識している点、失敗が多い点を確認して、改善点をお互いに話し合い、次の練習方法等を決めている。
おおむね満足 (B)	課題に応じた練習計画を見直すなど、互いに助け合い高め合おうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間への声掛けやアドバイスなどを行っている。 ・学習カードを確認しながら、練習内容でできたこと、できなかったことを確認して教え合い、次に生かそうとしている。
努力を要する (C)	課題に応じた練習計画を見直すことや、互いに助け合い高め合うことができない。	<ul style="list-style-type: none"> ・練習計画を見直さない。 ・互いに助け合うことができていない。

3 考察

今回の授業計画案において知識②を評価するのは計画全体の4時間目にあたり、3つ目と4つ目の技を習得する時間である。すでにグループワークを2、3時間目に実施しているため目標や課題の設定、実践や成果の確認は授業内の取組の中で理解できる段階にあると考えられる。毎時間学習カードを活用するため、評価方法は学習カードの記述内容から見取ることになる。2、3時間目の授業を踏まえて、課題解決の過程を理解した取り組みができているかを評価し、(B)となる回答は課題解決の過程を理解し、それを踏まえた記述があるが具体性に欠けるものとし、より具体的な記述がある回答を(A)にすることが考えられる。したがって、(C)となる回答は課題解決の過程を踏まえた記述がないものと考えることが適当である。自己及び他者の技能の確認、グループでの課題解決のための対話及び練習、これらの振り返りという一連の授業の流れの中での学びの成果が具体的に記述できるかが(A)のポイントとなる。

【質問例・回答例と評価の目安】

質問：課題を解決するための練習方法や次の課題の設定方法などについて、学んだことからどのように練習したかを書き出してみよう。(課題設定から練習、次の課題までの流れを具体的に記述する)

回答

(A)：開脚後転では後転の勢いが足りなかったのを課題として、ゆりかごのような動きで繰り返し練習した。グループの人に見てもらって勢いがつけられるようになってきてから技の練習をした。次に、全体の出来映えが良くなるように、始めや終わりに膝が曲がっていないかなどを見てもらいながら、姿勢を意識して全体の練習をした。

(B)：後転の勢いが課題なのでその練習をした。友達にできているか見ってもらって、できていたので次に技全体の練習をした。技全体の練習も友達に見てもらった。

(C)：始めは開脚後転ができなかったけど、練習したらできるようになった。

上記質問例では、質問以下のような回答例が予想される。質問については、評価規準に沿った、できるだけ具体的な内容であることが、期待する回答を導くことにつながるのではないかと考えられる。また、回答は語彙や表現の仕方に違いがあることを踏まえて判断の目安に当てはまるものを見取る必要があるため、見取り方によって評価に差が出るのが懸念される。したがって、より明確な判断の目安を作成しておく必要があると考えられる。

技能①の評価は、全体の6時間目に伸膝前転と伸膝後転を観察により評価する。これらの技は、柔軟性などの違いにより出来栄に差が出ることもある。生徒によっては難易度が高く、特に伸膝前転は苦手とする生徒が多い傾向があり、母集団の能力の違いもあるが、

(A) の判断の目安に到達できる生徒はそれほど多くないと考えられる。しかし、それまでの時間で培った課題解決の方法を応用して練習に取り組むことで、少しずつ課題を解決し、技を習得することが可能であるため、技の完成度が高くなくても、一定の評価ができる生徒は増えることが期待できる。本研究では、「学習した全ての技について、一連の動きをより滑らかに安定させて回ることができる。」を(A)の判断の目安としたが、(A)に到達する生徒が少なかったため、目標や評価規準を見直さなければならないと感じた。改善するためには、(A)の判断の目安を緩和することが適当であると考えられる。

思考・判断・表現①は器械運動2時間目の授業であり、前時で学習した基本技術と技のポイントを生かしながら練習する初めての時間である。開脚前転と倒立前転は入学年次にも行っているため、復習をしながら技能を高めていく時間となった。その中で、できる生徒とできない生徒がお互いを観察し合いながら、「何が良くて何が良くないのか」「できる生徒の共通点は何か」「できない生徒はどこを修正したらよいか」「できる生徒は何を改善したらよりよくなるのか」などの視点で観察させ、グループでの話し合いを促した。その後、グループで話し合ったことを踏まえて学習カードに振り返りを記入させることで、改善のための手だてについて考えさせた。この評価で重要な点は、「課題解決の過程を踏まえていること」と「新たな課題」である。(B)は、その2つの点を踏まえており、自他双方の意見が記入できている状況であると考えられる。(A)は、(B)に加えて適切で具体的な記述があるかどうかで判断することができる。(C)は、課題が発見できていない場合とすることが適当であると考えた。

【学習カードの回答例】

(A)：開脚前転で起き上がれない人は柔軟性がないだけでなく、起き上がる時に頭が押し込めず上体があがってしまっていた。手をつく位置を体に近づけ、頭を股の下に入れる感覚で頭を押し込むとできるのではないかと思った。また、そのためには足を開くタイミングを遅らせると押し込みやすいというアドバイスももらった。

倒立前転では倒立姿勢が維持できずに回転に入ってしまう。話し合いでは、友達から倒立時にマットを見ていないとの指摘を受けた。その点を意識し、顎を上げてマットを見るように気を付けると少し維持できるような気がした。倒立姿勢が維持できている人は足を揃えるところまで気を配っているように感じたので、次回はその点に注意して練習する。

(B)：開脚前転で起き上がれない人は柔軟性が足りない。また、上体が上がってずっと前を見てしまっているのが、最後にもっと手をついたところを見てマットを押した方が良い。

倒立前転では倒立姿勢が維持できない。マットを見ていないという指摘を受けたので、次回は意識して練習する。

(C)：開脚前転で起き上がれない人は膝が曲がって柔軟性がない。

倒立前転で倒立姿勢が維持できないので、次回はできるようにがんばる。

本研究で実施した、主体的に学習に取り組む態度の評価方法は観察である。新たに習得する技なので、2時間目の練習でもできない生徒は多かった。そのような状況の中で、グループで話し合いながら練習し、練習計画を見直しながらお互いに高め合う姿が見られるかを7時間目で観察し、評価した。自ら積極的に練習に取り組むだけでなく、仲間の補助を行ったり、仲間への課題を指摘したりしている姿が見られれば（B）とした。（A）は、何度も練習計画を見直し、繰り返し仲間の補助や課題について指摘している姿が見られた場合とした。（C）は自分の練習しかしない、仲間を補助する姿が見られない、仲間と話し合っただけ練習計画を見直そうとしないなどの場合とすることが適当であると考えた。

4 研究の成果と課題

一番の成果は、グループワークの有効性を確認できたことである。授業を効果的な学習活動にするための工夫であるグループワークは、「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」の育成に有効であることが明らかになった。グループワークの中で、他者と協働する場面が増えたことにより、発言や行動、記述の内容にそれらのことを見取ることができるようになった。また、知識の習得により、グループワークが活発になり、さらなる知識の定着を加速させることも考えられるため、知識の習得にも良い影響を及ぼしたと考えられる。さらに、技能以外の資質・能力は技能の習得に重要な要素であるため、全ての資質・能力をバランスよく育むことが大切であることがわかった。

今後の課題は、グループワークの際に、ほとんどの生徒が活発に活動することが予想されるため、主体的に学習に取り組む態度の評価規準を見直す必要があると考える。このこと以外についても、より適切な学習評価のためには、さらなる研究を継続する必要があると強く感じた。

【C 陸上競技】

2 指導と評価の具体例

(1) 「知識」を観察から評価する

評価規準 知識③

課題解決の方法には、自己に応じた目標の設定、目標を達成するため課題の設定、課題解決のための練習方法などの選択と実践、記録会などを通じた学習成果の確認、新たな目標の設定といった過程があることについて、具体例を挙げている。

実現状況	判断の目安	生徒の発言例
十分満足 (A)	課題解決の方法には、目標や課題の設定、方法の選択や実践、学習会の成果の確認や新たな目標の設定といった過程があることについて、理由や効果も含め、具体例を挙げ発言している。	<ul style="list-style-type: none"> ・初回授業でのタイム計測から、スタートで上手く加速できないことが分かったので、前傾を保持して加速することを意識して練習を行った。その結果、スタートから中間走までを滑らかに走ることができるようになり全体のタイムを上げることができた。
おおむね満足 (B)	課題解決の方法には、目標や課題の設定、方法の選択や実践、学習会の成果の確認や新たな目標の設定といった過程があることについて、発言している。	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートからの加速を意識して練習をすることでタイムを上げることができた。 ・動きづくりで練習したことを意識した結果、タイムを上げることができた。
努力を要する (C)	課題解決の方法には、目標や課題の設定、方法の選択や実践、学習会の成果の確認や新たな目標の設定といった過程があることについて、指導者の支援を借りながら発言している。又は、発言できていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・前よりも速く走れるようになってきた。 ・スタートを意識した。 ・〇〇さんに負けた。

(2) 「技能」を観察及び ICT 機器による観察から評価する

評価規準 技能③

リレーでは、大きな利得距離を得るために、両走者がスピードにのり、十分に腕を伸ばした状態でバトンを渡すことができる。

実現状況	判断の目安	生徒の状況
十分満足 (A)	両走者がスピードにのり、腕を伸ばした状態で、滑らかにバトンを渡すことが何度もできる。	<ul style="list-style-type: none"> 両走者が十分にスピードにのった状態で、最大限の利得距離を得たバトンパスを複数回行うことができている。
おおむね満足 (B)	両走者が腕を伸ばした状態でバトンを渡すことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 次走者がスタートしたタイミングに合わせ、前走者が大きな利得距離を得るようにスピードを調整してバトンを渡している。 前走者との距離に応じて、次走者がスピードを調整してバトンを受けている。
努力を要する (C)	両走者が腕を伸ばした状態でバトンを渡すことができていない。	<ul style="list-style-type: none"> 次走者と前走者の利得距離が長くとれず、詰まった状態でのバトンパスになっている。 次走者のスタートのタイミングが早く、バトンが受け渡せていない。

(3) 「思考・判断・表現」を観察・ワークシートから評価する

<p>評価規準 思考・判断・表現③</p> <p>体力や技能の程度、性別等の違いを超えて仲間とともに陸上競技を楽しむための調整の仕方を見付けている。</p>
--

実現状況	判断の目安	生徒の回答例
十分満足 (A)	体力や技能の程度、性別等の違いを超えて仲間とともに楽しむための調整の仕方を具体的に提案し、その振り返りから更に修正を図ることができている。	<ul style="list-style-type: none"> 自他の課題を適切に分析し、解決するために有効な練習方法を具体的に考えることができている。 短距離走の記録などから走る順番を考えたり、バトンパスの方法、マークの位置を工夫したりするなど、より効率的なバトンパスについて具体的に記述することができている。

<p>おおむね満足 (B)</p>	<p>体力や技能の程度、性別等の違いを超えて仲間とともに楽しむための調整の仕方を提案している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の課題を分析し、解決するための練習方法を考えることができている。 ・走る順番を考えたり、バトンパスの方法を工夫したりするなど、効率的なバトンパスについて記述することができている。
<p>努力を要する (C)</p>	<p>体力や技能の程度、性別等の違いを超えて楽しむためのアイデアを提案することができていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の課題を分析することができていない。 ・効率的なバトンパスについて記述することができていない。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」を観察・ワークシートから評価する

<p>評価規準 主体的に学習に取り組む態度② 一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。</p>
--

実現状況	判断の目安	想定される様相
<p>十分満足 (A)</p>	<p>一人一人の違いに応じた課題や挑戦について肯定的に考えたり、相手を気遣ったりする行動が定着している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の違いに配慮をしながら、自他の課題が解決できるよう、適切に練習を工夫することができている。 ・ペアの特徴を踏まえて具体的なアドバイスや、より改善するための練習方法を考えている。
<p>おおむね満足 (B)</p>	<p>一人一人の違いに応じた課題や挑戦を尊重し、ペアの活動を受け入れようとしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の課題が解決できるように練習方法を工夫することができている。 ・ペアの特徴を踏まえたアドバイスを考えている。
<p>努力を要する (C)</p>	<p>一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとはせず、ペアの活動を敬遠しようとする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の課題が解決できるように練習方法を工夫することができていない。 ・課題に向き合うことができていない。 ・ペアの特徴を踏まえたアドバイスを考えていない。

3 考察

今回設定した授業（5時間目）において知識を「観察」で評価しようとする場合、自己に応じた目標の設定や目標を達成するための課題設定の項目ではなく、記録会などを通じた学習成果の確認や新たな目標設定の項目を評価することになる。一般的な評価の方法でいえば、ワークシートに記述させ、指導者との対話などを観察していくことになる。評価方法の考え方については、1時間目での100m走の計測での主観的評価と、ICT等を活用した客観的評価を把握・理解した上で、目標設定や練習課題の設定ができていることが大前提にある。つまり、その内容を踏まえた回答がなかった場合や、指導者の助言を借りて回答できた場合の評価については、(C)となる。(A)については、1時間目の計測の結果や評価と5時間目の計測の評価を、学習者の目標に照らし合わせて、主観的感覚と客観的結果を比較分析した回答がなされているか、また、走行時の意識すべき身体部位や身体の動かし方等を具体的に回答できているかがポイントになると考える。

「知識」の判断の目安(C)の中に、「指導者の支援を借りながら発言している。」という文言がある。ここで、学習者は発言できているにもかかわらず(C)にすることに対して疑問が生じる場合もある。この部分については、指導者の支援の程度や学習者の発言の程度にもよるため、どの程度で(B)や(C)にするかの判断の目安を教科内で検討する必要がある。例えば、指導者の支援を借りながらも発言できていれば(B)とするのであれば、発言できていない場合を(C)とし、あらかじめ(B)と設定していた判断の目安を(A)に含めて評価するなど、学習者の実態に合わせて判断の目安を工夫する必要がある。

【質問例・回答例と評価の目安】

質問：本時の計測を評価し、次の目標を決めてみよう！（初回授業の計測結果と比較し、意識したところ、できたところ、できなかったところなどを記述しよう。）

回答

(A)：初回授業の計測では、50mを過ぎたあたりから顎が上がり、腕振りが乱れて上半身が大きく揺れてしまった結果、急激にスピードが落ちてしまった。そのため、練習では後半の走りにおいて、できる限りスピードが低下してしまわないようにインターバル練習を取り入れ、走るフォームが後半になっても乱れないようにすることを意識した。その甲斐あって今回の計測では、自分自身の感覚でも腕振りが乱れることなく走ることができた。また、動画を確認し走行スピードを計算したところ、初回授業よりも低下することなく走ることができており、その結果100m走のタイムを0.5秒更新することができた。しかし、今回の計測では、スターティングブロックのスタートにおいて反応が遅れ、躓いてしまったので、次回はスタートからの脚の接地と加速に重点を置き練習をしていきたい。

(B)：初回授業の計測では、50mを過ぎたあたりから脚が急に動かなくなり、全然タ

タイムが出なかったので、練習では友達とインターバル練習をたくさん行った。その結果、今回の計測では後半でも急に脚が動かなくなるということもなく、100m走のタイムも0.5秒更新したので嬉しかった。しかし、スターティングブロックで失敗してしまったので次回はそれを練習していきたい。

(C)：初回授業の計測よりもスタートで躓いたがタイムが上がって嬉しかった。次も頑張りたい。

今回の質問、『本時の計測を評価し、次の目標を決めてみよう！（初回授業の計測結果と比較し、意識したところ、できたところ、できなかったところなどを記述しよう。）』を発問した場合、上記のような回答が返ってくると想定され、各回答例が各判断の目安に相当すると考える。

質問が『本時の計測を評価し、次の目標を決めてみよう！』のみだった場合、どのような評価規準になるか考察してみた。この場合、指導者が期待している回答は、今回の計測の分析・評価と次の目標のみである。つまり、上記の回答例において、具体性は欠けているものの(B)の回答例も(A)に相当する可能性がある。生徒の回答のどの部分に重きを置いて評価するかを教科内で検討しておく必要がある。また、今回は観察での評価を想定したため、生徒の習熟度とコミュニケーション能力を踏まえたくて質問しないと、評価の妥当性が担保されない可能性がある。例えば、分析はできているのに発表が上手くできないから、本来は(A)だが(B)などの評価となる可能性があるので、注意しなければならない。

さらに、今回の質問には『具体的に』という文言が入っておらず、このことも考慮しなければならない。生徒が具体的な内容を回答するかどうかは予測できないが、聞かれていることに回答しているという状況になることがある。つまり、今回の質問内容であれば、(B)の回答例が(A)に相当する回答であるとも考えられる。また反対に、質問内容に『具体的に』が含まれているのであれば、上記の(A)の回答例が(B)に相当する可能性も考えられる。具体性の程度を教科内で共有して、公平に評価することは非常に難しいため、今回は「観察」のみで評価するのではなく、「ワークシートへの記述」も併用することで、教科内での検討が可能となった。

リレーのバトンパスの技能の評価については、学習指導要領解説に記載されている『リレーでは、大きな利得距離を得るために、両走者がスピードにのり、十分に腕を伸ばした状態でバトンを渡すことができる。』状況の判断の目安を(B)にした場合、(A)はどの程度を想定して判断の目安を定めるのが非常に難しい。複数回成功させることを評価するのか、誰とペアを組んでもできるということの評価するのか、さまざまなバトンパスの方法を習得できることを評価するのかなど、不鮮明な部分も多く、各学校の状況に委ねられている部分が多い。そのため、今回はこの学習指導要領解説に記載されているものを(A)として設定し、考察することにした。

評価のポイントは「両走者がスピードに乗っている」と「腕を伸ばした状態」の2点がどのような状態で達成できているかである。(C)の判断の目安については、バトンパスに成功しなかった場合とバトンの受け渡しは成功しているが、評価のポイントが2点とも達成されていない場合、両走者の距離が詰まってしまう、スピードが落ちた状態のバトンパスをした場合を想定している。(B)の判断の目安では、バトンパスの成功は大前提として、両走者のスピードではなく、腕を伸ばした状態でバトンパスができていくか(利得距離)に重点を置いて設定した。次走者が出るタイミングによって、両走者でスピードを調整し、最大限の利得距離を得ることができているかで評価すると適切である。(A)の判断の目安については、2つのポイントをどちらも達成した状態(両走者がスピードを緩めることなく、大きな利得距離を得ることができている)である。これらを見取る場合も、目視のみでは評価することは難しいと考えられるので、動画を撮影し確認するなどの工夫が必要である。

また、別の方法での技能の評価を考えてみると、「両走者がスピードに乗っている」と「腕を伸ばした状態」の2点がどちらも達成できていれば(A)、どちらか1点が達成できており、バトンパスが成功していれば(B)、どちらも達成できていない状態でのバトンパス成功や、バトンパスが失敗している場合は(C)とする評価規準の設定も考えられる。

加えて、一般的にリレー競技において、利得距離を重要視するバトンパスの方法はオーバーハンドパスであり、学習指導要領でもオーバーハンドパスを想定していると考えられる。しかし、現在の日本代表男子チームの4×100mリレーのバトンパスはアンダーハンドパスを採用しており、4×400mリレーではまた別のバトンパスの方法を採用したりしている。つまり、バトンパスの技能の到達目標は利得距離を多くとることよりも、両走者がしっかりスピードに乗った状態でバトンパスを行うことができるかに重点を置いて技能の習得を行うという考え方もある。この場合、「両走者がスピードに乗っているか」を重視した判断の目安になるため、30mのテークオーバーゾーン区間内のバトン自体の通過時間を計測し、その記録を技能として評価することになる。つまり、テークオーバーゾーン内のバトンパス完了位置は加味する必要がなく(どの位置でどちらの走者がバトンを持っているかも加味する必要がない)、利得距離はほとんど評価に影響しない。バトンが速く進めばよいということになってしまう。

リレー種目の醍醐味は「チームで一致団結して、いかにバトンを速く運ぶか」である。そのため、バトンパスの練習を効果的に進めていくには、両走者のコミュニケーションが重要であり、どのタイミングで次走者がスタートをするかをよく検討する必要があり、検証と評価を繰り返していくことになる。このような学習活動については、ワークシートなどを用いて、思考・判断・表現で評価していくことが望ましいと感じた。

思考・判断・表現③では、前時までの100m走の計測や200mのペアでのリレー計測での課題の分析とその解決を行い、新しく始まったバトンパス練習から課題の発見や課題解決

の方法を考える時間である。評価の方法はワークシートとペアでの話し合いを観察で評価していく。評価については、まず200mのペアでのリレー計測で出た課題を適切に分析し、その課題に対しての具体的な解決方法を提案できているかどうかを評価する。また、新しくバトンパスの練習が始まるので、仲間の100m走のタイムや特徴（スタートが得意、バトンパスが上手い等）を生かして走る順番を考えることや、バトンパスの方法を工夫し、効率的なバトンパスについて互いにコミュニケーションをとりながら考えることができているかを評価していく。仲間の走力を考慮してマークの位置を工夫できているか、特徴を考えて走順の工夫ができているか、練習から自分たちの効率の良いバトンパスの方法を見つけられているかなどが判断の目安となる。(B)は課題を分析し、その課題の解決方法を考えることができているか、また効率的なバトンパスをするための工夫がなされている場合である。(A)は、自他の課題をしっかりと分析できており、その課題に対して具体的な解決方法が示されている場合や効率的なバトンパスのための工夫がしっかりとされている場合であり、(C)は課題の分析が上手くできていない場合や、バトンパスについて具体的に考えられていない場合である。

【ワークシート質問例と回答例】

質問：200mリレーで出た課題を、ペアでどう改善したのか記述してみよう。

回答

- (A)：200mリレーでは、バトンパスの際に腕を伸ばして、スピードを高めて受け渡すことができなかつたため、バトンパスの練習の時に15足長のところにマークを置き練習をしてみたところ、お互いにスピードに乗ってバトンパスをすることができた。
- (B)：200mリレーでは、バトンパスの際にスムーズに受け渡すことができなかつたため、バトンパスの練習の時に声をかけてパスをすることでスムーズに受け渡すことができるようになった。
- (C)：200mリレーでは、バトンパスの際にうまく受け渡すことができなかつたが、練習を繰り返すことでスムーズに受け渡すことができるようになった。

「今日のバトンパス練習で、見つかった課題を記述してみよう。」という質問についても想定される回答を考察してみた。よくある回答は「バトンパス練習では、最初振り向いてバトンを渡していたが、スピードに上手く乗ることができなかつた。振り向いて渡す方法は確実にバトンを渡せるがスピードに乗りにくいことが分かつたので、次の練習では振り向かずにオーバーハンドパスでのバトンパスを試してみようと思う。」などのように、技術的な知識の内容に片寄ってしまう例がある。ワークシートを使って評価を行う際は、どの観点を評価するのかをしっかりと考え、質問を精査して作成する必要があると感じた。

主体的に学習に取り組む態度②はペアワークの観察及びワークシートでの評価となる。

ここでは100m走の計測を行い、1回目の計測との違いをペアで話し合う中で、一人一人の違いに応じて課題や挑戦が変わってくるのが理解できているか、実現可能な課題の設定や挑戦になっているか、仲間の特徴を理解して具体的なアドバイスをすることができるかなどを判断の目安にすることにした。例えば「計測を終えて〇〇さんへアドバイスをしてみよう」などのような質問が考えられる。計測を終えて仲間の特徴を踏まえながら良い点や修正点についてアドバイスができたり、実現可能な課題の設定やそれを解決できるような練習を工夫している場合は（B）となる。（A）では、一人一人の特徴や違いに配慮した具体的な発言やアドバイスがみられる場合や、現状へのアドバイスに加えて今後さらに良くするための発言や働きかけがなされている場合が考えられる。（C）では、仲間の特徴を踏まえずにアドバイスをしている場合や課題を解決するための練習を工夫できていないなどの回答がみられた場合となる。

4 研究の成果と課題

今回、陸上競技の短距離走・リレーの学習評価について検討していく中で、適切な評価とは何か、評価の妥当性を高めるためには何が必要なのかについて、深く考える機会となった。指導する生徒の状況によって、目指す目標が異なるため、学習指導要領を理解し、授業展開を工夫して、評価方法や評価規準を教科内で十分に検討して共有する必要がある。また、「十分準備したにもかかわらず、指導者が想定した生徒の状況と大きく異なっていること」もあり、授業計画や評価計画を修正することがある。日々の授業において、指導と評価を一体として捉えることにより、妥当性のある評価方法や評価規準が生まれてくるものと考えられる。

本研究の成果は、生徒に対してどのような問いかけ（発問）を行うかが非常に大切であるということを改めて実感できたことである。当然のことであるが、この問いかけ（発問）をどのように行うかによって生徒がどのように回答するかが変化する。生徒に対して、授業の内容を踏まえてどのような回答を期待しているかで、問いかけの内容も変化し、判断の目安も変化する。判断の目安が適切に定められていないと、生徒に求める姿を妥当に評価することができない。

今後は本研究の成果を生かして、教科「保健体育」のより良い指導と評価を実践していきたい。

【D 水 泳】

1 指導と評価の計画

単元の目標	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	授業づくりのポイント
知識及び技能	次の運動について、記録の向上や競争及び自己や仲間の課題を解決するための多様な楽しさや喜びを味わい、技術の名前や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、難関の仕方などを理解するとともに、自己に適した泳法の効率を高めて泳ぐことができるようにする。												
思考力、判断力、表現力等	生涯にわたって運動を豊かに継続するための自己や仲間の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。												
学びに向かう力、人間性等	水泳に主体的に取り組むとともに、勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとするなど、水の事故防止に関する心得を遵守するなど健康・安全を確保することができるようにする。												
0	点呼、健康観察、準備運動、本時の学習内容の確認												
10	オリエンテーション ・楽しさ ・危険性 ・マナー	<p>自己に適した泳法を選択し効率を高める練習</p> <ul style="list-style-type: none"> クロール(板キック、片手ストローク、キック、プル、呼吸動作のタイミング) 平泳ぎ(板キック、背面キック、その場ストローク、板踏みストローク、スイムドリル、呼吸動作のタイミング) 背泳ぎ(板キック、片腕持ち上げキック、片腕ストローク、水面タッチストローク、呼吸動作のタイミング) バタフライ(板キック、背面キック、イルカ跳び、片腕ストローク、1ストローク5キック、呼吸動作のタイミング) 											
20	入学年次の泳法の振り返り ・クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ	<p>課題別練習</p> <p>各泳法におけるスタート、ターン練習</p> <ul style="list-style-type: none"> スタート(水中スタート、プールサイドで座位、ターン(け伸び前転、側転、回転、蹴り出し) <p>模擬競技会</p> <ul style="list-style-type: none"> 記録会 リレー 											
30	自己の苦手な種目の復習 ・クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ	<p>競技会</p> <ul style="list-style-type: none"> 記録会 リレー 											
40													
50		点呼、健康観察、整理体操、本時のまとめ、次時の課題、学習ノート記入指示											
評価機会	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	主な評価方法
知	①		②					③				④	観察、学習ノート
技					①	②	③	④	⑤⑥				観察
思	②				①				②		③		観察、学習ノート
態				④		①				③		②	観察

①水泳では、各種目や運動の局面ごとに技術の名称があり、それぞれの技術には、効率のよい泳ぎにつながる重要な動きのポイントや安全で合理的、計画的な練習の仕方があることについて、学習した具体例を挙げている。
 ②水泳の種目によって必要な体力要素があり、その種目の技能に即連させながら体力を高めることについて、学習した具体例を挙げている。
 ③課題解決の方法には、自己に応じた目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習方法などの選択と実践、記録会などを通して学習成果の確認、新たな目標の設定といった過程があることについて、言ったり書き出したりしている。

④競技会や記録会で競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方などがあることについて、学習した具体例を挙げている。
 ①クロールでは、手は速くの水をつかむように前方に伸ばすことができる。
 ②平泳ぎでは、プルのかき終わりと同時に、顎を引いて口を水面上に出して息を吸い、キックの蹴り終わりに合わせて、流線型の姿勢を維持して大きく伸びることができる。
 ③背泳ぎでは、かき終わりで肘を伸ばした後、肩のローリング動作を促してリズムよくリカバリー動作を行うことができる。
 ④バタフライでは、体のうねり動作に合わせたしなやかなドルフィンキックをすることができる。
 ⑤各泳法に適した準備の姿勢から、スタートの合図と同時に力強く蹴りだし、抵抗の少ない姿勢で進行方向に体を伸ばすことができる。
 ⑥ターンの行い方に応じた抵抗の少ない姿勢で回転し、方向を变换することができる。

①練習した泳法について、自己や仲間の動きを分析して、良い点や修正点を指摘している。
 ②練習や競技会などの場面で、自己や仲間の危険を回避するための活動の仕方を提案している。
 ③水泳の学習成果を踏まえて自己に適した「する、みる、支える、知る」などの生涯にわたって楽しむための関わり方を見付けている。
 ①水泳の学習に主体的に取り組む、ルールやマナーを大切にしようとしている。
 ②勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとしている。
 ③一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。
 ④水泳の事故防止の心得を遵守し、危険の予測をしながら回避行動をとるなど、健康・安全を確保している。

* 網掛けは、事例研究該当箇所。本検察内は、昨年度からの追加箇所。

2 指導と評価の具体例

(1) 「知識」を学習ノートから評価する

<p>評価規準 知識④</p> <p>競技会や記録会で、競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方などがあることについて、学習した具体例を挙げている。</p>
--

実現状況	判断の目安	生徒の回答例
十分満足 (A)	競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方について、具体的な知識と汎用的な知識を関連付けて具体例を挙げている。	・リレーでは、「メンバーのベストタイムからハンディキャップを設定することで、全員が楽しく勝敗を競うことができる。」など具体的に記述している。
おおむね満足 (B)	競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方について、具体例を挙げている。	・リレーでは、「ハンディキャップを設定することで、全員が楽しく勝敗を競うことができる。」などと記述している。
努力を要する (C)	競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方について、具体例を挙げている。	・リレーでは、全員が楽しく勝敗を競うことができるような具体例が記述されていない。

(2) 「技能」を観察から評価する

<p>評価規準 技能①</p> <p>クロールでは、手は遠くの水をつかむように前方に伸ばすことができる。</p>
--

実現状況	判断の目安	生徒の状況
十分満足 (A)	クロールでは、手は遠くの水をつかむように前方に伸ばし、肘を曲げて腕全体で水をとらえることで、加速するように泳ぐことができる。	・手を遠くの水をつかむように前方に伸ばした後、肘を曲げて腕全体で水をとらえ、大腿までかききることができる。
おおむね満足 (B)	クロールでは、手は遠くの水をつかむように前方に伸ばすことができる。	・手を遠くの水をつかむように前方に伸ばすことができる。
努力を要する (C)	クロールでは、手は遠くの水をつかむように前方に伸ばすことができない。	・手を前方に伸ばすことができない。

(3) 「思考・判断・表現」を観察・学習ノートから評価する

<p>評価規準 思考・判断・表現①</p> <p>選択した泳法について、自己や仲間の動きを分析して、良い点や修正点を指摘している。</p>

実現状況	判断の目安	生徒の状況・回答例
十分満足 (A)	自己や仲間の動きを分析して、良い点や修正点を、具体的に分かりやすく挙げている。	・自他の動きを分析し、必要な技能を調べ、具体的に分かりやすく記述している。
おおむね満足 (B)	自己や仲間の動きを分析して、良い点や修正点を挙げている。	・自己の動きを分析し、良い点や修正点を記述している。 ・仲間の動きを分析し、良い点や修正点を指摘している。
努力を要する (C)	自己や仲間の動きを分析せず、良い点や修正点を記述していない。	・自己の動きを分析しておらず、良い点や修正点を記述していない。 ・仲間の動きに関心を持たず、良い点や修正点を指摘していない。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」を観察から評価する

<p>評価規準 主体的に学習に取り組む態度③</p> <p>一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。</p>

実現状況	判断の目安	想定される様相
十分満足 (A)	一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとする発言や行動が定着しており、他者を気遣おうとしている。	・一人一人の違いに応じた課題への配慮や、挑戦を支援するなどの発言や働きかけが安定してみられる。 ・うまくできなかったときに、一人一人の違いを踏まえて、自己や他者への肯定的な発言や働きかけがみられる。
おおむね満足 (B)	一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切に、気遣おうとしている。	・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切に、課題別練習に取り組む様子がみられる。

<p>努力を要する (C)</p>	<p>一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとする行動が定着しておらず、他者を気遣うことができていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の違いが生じている状況でも、関わりを遠ざけたり、あきらめたりするなど消極的な姿勢が教師の働きかけの後もみられる。 ・他者の挑戦を肯定しない言動がみられる。 ・教師が働きかけを行っても、他者の意欲を低下させる否定的な言動がみられる。
-----------------------	--	--

3 考察

今回の指導と評価の計画を参考に水泳の授業を以下の内容で実践した。1時間目の授業において、クロールと平泳ぎの50mの記録を測定し、個人の泳力の把握をした。2～4時間目の授業では、各自の泳力ごとにレーンを分け、効率のよい泳ぎにつながる動きのポイント等、各自の課題解決に向け仲間とともに取り組む時間とした。この活動では、泳力の高い水泳経験者が中心となって指導・助言するなど積極的に取り組む姿が見られた。5時間目の授業においては、再度クロールと平泳ぎの50mの記録を測定し、泳ぎ方や記録の変化を見ることで自己や仲間の動きを分析し、良い点や修正点を分析する時間を設けた。その後の授業では、各自の課題解決に向けた練習内容を選択し取り組むとともに、模擬競技会(記録の測定やリレー)を行うことでさらなる技能の向上を目指して教え合う雰囲気醸成させることができた。リレーの競技会を行うにあたっては、「みんなが楽しめるリレーのルール工夫」について考えさせ、提案があった方法で実施した。なお、授業では毎時間、水泳事故防止の心得について遵守を促し、危険予知・危険回避などの健康・安全面に対しては丁寧に指導した。

「知識」の評価では、「みんなが楽しくリレーを行うためには、どのような工夫をすべきか？」と発問をし、学習ノート(ロイロノート)で回答させたところ、判断の目安が(A)に相当すると考えられる「ベストタイムをみてチームを編成する」という回答が多くあった。また、「クロール板キック、平泳ぎ板キック、板挟みストロークなどの泳法をいれることで、みんな楽しむ。」といったより具体的な回答もあった。しかし、発問の意味を取り違えて回答してしまう生徒もいたため、発問の内容をしっかりと精査し、伝達していく必要があると感じた。

「技能」を観察から評価する上で、判断の目安を作成することは非常に有意義であった。生徒にとっても分かりやすく、指導にも反映させやすいと感じた。現在本県では、プールの老朽化などを理由に水泳の授業を行わない学校が増えており、水泳の授業を経験したことのない教員が増えている。このような状況を踏まえても、判断の目安を作成すること

は、教員が学習評価の相互理解を深める重要な役割を果たしていると考えられる。

「思考・判断・表現」を学習ノート（ロイロノート）から評価するにあたり、生徒がクロールと平泳ぎの 50m の記録の変化から課題解決できたことは非常に有意義であった。「自分自身の泳ぎを成長させてくれた仲間のアドバイスは何でしたか？」の問いに、「A 君の、『1 回 1 回のバタ足で足が水中に沈んで行ってしまいロスが大きいから、バタ足を小さくするといいよ。』というアドバイスのおかげで、クロールのタイムが 7 秒速くなった。」や、「頑張っている仲間にアドバイスすることで、基本に戻って綺麗に遠くから水をかくことを意識して泳いだらタイムが上がった。」といった水泳経験者からの記述もあり、練習中には気付くことのできなかつた仲間との課題解決に向けた取組を知ることができた。

「主体的に学習に取り組む態度」に関しても、判断の目安を作成したことで順調に評価に取り組むことができた。授業では、各自の課題解決に向けた取組を見取ることができ、効果的に学習させることができたと考えている。今後も、このような授業展開をさらに活性化させるための方法を模索していく必要がある。

4 研究の成果と課題

「技能」と「主体的に学習に取り組む態度」に関しては、判断の目安を作成することで、他の教員との共通理解を明確に図ることができた。特に「技能」においては、自身がタイムによる評価に頼りがちであったこともあり、考え直すきっかけとなった。今後は、さらに改善を進めていき、評価の妥当性を高めていきたい。

「思考・判断・表現」を観察により評価する場合は、生徒の活動中に見取ることのできない場面が多々あるため、学習ノートの活用が有効であった。「知識」の評価においても言えることであるが、学習のノートを活用する中で、何よりも大切なのは「発問の仕方の工夫」である。今回の「みんなが楽しくリレーを行うためには、どのような工夫をすべきか？」の発問では、45.8% の生徒の評価が（A）に相当した。生徒の知識や思考・判断・表現を的確に評価できるような発問の仕方を模索していくことも今後の大きな課題であるため、自己研鑽していく必要がある。また、水泳授業中における学習カードやタブレット端末の活用は、水に濡れている状態で取り扱いが難しく、その授業時間内に課題を提出させることが困難である。どうしても授業時間外での提出になってしまうことが悩ましいため、今後の課題にしたい。

本研究では、各観点 1 つのみの評価場面についての事例研究を実施したが、指導と評価の計画表では合計 17 の評価機会が示されている。より良い授業づくりのために、評価に追われる授業にならないよう、今後も研究を続けていく必要がある。

【F 武 道】

1 指導と評価の計画

単元の目標	知識及び技能	次の運動について、勝敗を観たり自己や仲間の課題を解決したりするなどの多様な楽しさや喜びを味わい、伝統的な考え方や、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、課題解決の方法、試合の仕方などを理解するとともに、得意な技などを用いた攻防を展開することができるようにする。 ア 柔道では、相手の動きの変化に応じた基本動作から、得意技や連絡技・変化技を用いて、素早く相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防をすることができるようにする。												
	思考力、判断力、表現力等	生涯にわたって運動を豊かに継続するための自己や仲間の課題を発見し、合理的、計画的な解決法に向けて取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたとことを他者に伝えることができるようにする。												
学習の目標	学習に向かう力、人間性等	武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとする												
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	授業づくりのポイント ・技能の習得を通して、知識の大切さを実感できるようにする。 ・ICTを用いて自己や仲間の動きをふり返り、新たな課題を設定したり、教え合ったりする場面を設定することができるとともに、自己や仲間の体格や技量を把握させ、安全に配慮した展開にする。
学習の流れ	10	共通メニュー（準備運動、補強運動、本日の学習内容の確認）												
	20	基本動作と受け身の確認	固め技	投げ技①	投げ技②	試合	試合の動画鑑賞	まとめ						
30	受け身の簡易テスト	固め技の練習と逃げ方の練習 ・固め技の練習と逃げ方の練習 ・固め技の練習と固め技の乱取り	投げ技① ・投げ技の練習と投げ技の防御の練習 ・投げ技の投げ込み練習	投げ技② ・投げ込みの乱取り ・投げ技の連絡の練習 ・投げ技から固め技への連絡の練習	試合	試合の動画鑑賞	まとめ							
40														
50														
評価機会	知	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	主な評価方法
	技	①									②	③		ワークシート 観察
単元の評価規準	思			①		②			②					観察・ワークシート
	態		③		①			②			③			観察
知	知	①武道では、各種目で用いられる技の名称や用語があり、それぞれの技には、技の向上につながる重要な動きや用具の操作のポイント及び安全で合理的、計画的な練習の仕方があることについて、学習した具体例を挙げている。 ②課題解決の方法には、自己に応じた目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、試合などを通じた学習成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、言ったり書き出したりしている。												
	技	③試合で、競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方などがあることについて、学習した具体例を挙げている。 ④投げ技と投げ技の防御では、取は内股をかけて投げることで、受は受け身を崩すことで防ごうとしている。 ⑤投げ技の連絡では、取は相手の動きの変化に応じて向きながら、投げ込み、横四方固め、上四方固め、横四方固め、内股から内股への連絡ができる。 ⑥投げ技から固め技への連絡では、内股から投げ込みへの連絡することができる。 ⑦見取り稽古などから、自己や仲間の動きを分析して、良い点や修正点を指摘している。 ⑧課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見している。 ⑨武道の学習成果を踏まえて、自己に適した「する、見る、支える、知る」などの運動を生産にわたって楽しむための関わり方を更けている。												
思	思	①武道の学習に主体的に取り組もうとしている。 ②一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。 ③失敗の予測をしながら回避行動をとるなど、健康・安全を確保している。												
	態	④課題解決の過程を踏まえて、自己に適した「する、見る、支える、知る」などの運動を生産にわたって楽しむための関わり方を更けている。												

①武道では、各種目で用いられる技の名称や用語があり、それぞれの技には、技の向上につながる重要な動きや用具の操作のポイント及び安全で合理的、計画的な練習の仕方があることについて、学習した具体例を挙げている。
②課題解決の方法には、自己に応じた目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、試合などを通じた学習成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、言ったり書き出したりしている。
③試合で、競技のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方、全員が楽しむためのルール等の調整の仕方などがあることについて、学習した具体例を挙げている。
④投げ技と投げ技の防御では、取は内股をかけて投げることで、受は受け身を崩すことで防ごうとしている。
⑤投げ技の連絡では、取は相手の動きの変化に応じて向きながら、投げ込み、横四方固め、上四方固め、横四方固め、内股から内股への連絡ができる。
⑥投げ技から固め技への連絡では、内股から投げ込みへの連絡することができる。
⑦見取り稽古などから、自己や仲間の動きを分析して、良い点や修正点を指摘している。
⑧課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見している。
⑨武道の学習成果を踏まえて、自己に適した「する、見る、支える、知る」などの運動を生産にわたって楽しむための関わり方を更けている。

※ 網掛けは、事例研究該当箇所。太枠線内は、昨年度からの追記箇所。

2 指導と評価の具体例

(1) 「知識」をワークシートから評価する

<p>評価規準 知識②</p> <p>課題解決の方法には、自己に応じた目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、試合などを通じた学習成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、書き出している。</p>
--

実現状況	判断の目安	生徒の回答例
十分満足 (A)	目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、試合などを通じた学習成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、具体的に書き出している。	<ul style="list-style-type: none"> ・練習で行った小内刈から大内刈を使い、上手くかけられなかった反省をし、見本と比較して改善点に気付くことができた。 ・自分の問題点に気付き、具体的な修正点やポイントについて記入できた。
おおむね満足 (B)	目標を達成するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、試合などを通じた学習成果の確認、新たな目標設定といった過程があることについて、書き出している。	<ul style="list-style-type: none"> ・練習で行った小内刈から大内刈を使い、技をかけるための反省を記入することができた。 ・自分の問題点について記述できた。
努力を要する (C)	振り返りから新たな目標設定ができていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がかけた連絡技について記入することができなかった。 ・改善点を見つけることができなかった。

(2) 「技能」を観察から評価する

<p>評価規準 技能③</p> <p>固め技の連絡では、取は相手の動きの変化に応じながら、けき固め、横四方固め、上四方固めに加えて、肩固め、縦四方固めの連絡をすることができる。</p>
--

実現状況	判断の目安	想定される様相
十分満足 (A)	相手の動きの変化に適切に応じ工夫しながら、しっかりと固め技を連絡し、抑え続けることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・逃げる相手に対して、固め技の形を変化している。 ・逃げようとする相手の動きや体の向きに応じて連絡して抑え込みを継続している。

おおむね満足 (B)	相手の動きの変化に応じながら、固め技を連絡しようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・逃げる相手に対して、固め技をかけている。 ・逃げようとする相手の動きや体の向きに関わりなく、連絡して抑え込みを継続している。
努力を要する (C)	固め技を連絡しようとしていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・逃げようとする相手の動きや体の向きに関わりなく、力に任せて抑え込んでいる。

(3) 「思考・判断・表現」を観察・ワークシートから評価する

<p>評価規準 思考・判断・表現②</p> <p>課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見している。</p>

実現状況	判断の目安	生徒の回答例
十分満足 (A)	投げるまでの崩しなどの過程を踏まえて、自己や仲間の新たな課題を発見したり、克服のため相互に工夫したりしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の技をかけるための修正点を具体的に記入できたり、他者の技との比較などを記入したりすることができた。 ・他者の技を見てアドバイスをすることができた。
おおむね満足 (B)	投げるまでの崩しなどの過程を踏まえて、自己の新たな課題を発見したり、克服のために工夫したりしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の技をかけられるよう工夫する点を記入できた。 ・自分の投げ技の課題を見つけるために他者の技を観察した。
努力を要する (C)	課題を見つけることができない。	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の技をかけるための修正点を記入できなかった。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」を観察から評価する

<p>評価規準 主体的に学習に取り組む態度③</p> <p>危険の予測をしながら回避行動をとるなど、健康・安全を確保している。</p>

実現状況	判断の目安	生徒の状況
十分満足 (A)	相手への危険性も考えた上で、攻防の中で安全かつ適切に試合を進めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 相手の動きに応じて連絡するなど、試合の中で正しく技をかけている。 相手との体格差や技量に応じて安全に配慮して技をかけることができた。 逃げる時には、相手や周囲に配慮しながら安全な回避行動を取ることができている。
おおむね満足 (B)	相手への危険性も考えた攻防の中で、安全に試合を進めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 技を変化しているなど、相手への安全に配慮して技をかけることができた。 逃げる時に無理なく回避行動を取ることができている。
努力を要する (C)	攻防の中で相手への危険性を考えて試合を進めることができていない。	<ul style="list-style-type: none"> ポイント等を押さえず、無理な攻防を展開している。 相手への安全に配慮して試合を進めることができない。 逃げる場面では周囲への配慮なく無理に回避行動を取った。

3 考察

柔道は体育の種目の中で、怪我のリスクが高い種目である。怪我が発生しないようにするために、試合における柔道着の着方や受け身といった基本的な資質・能力を十分に身に付けさせる必要がある。

「知識」の評価に関して、今回はワークシートでの評価を取り入れて、試合を通して評価をする場面を採用したため、評価のタイミングは、授業計画の終盤となった。本研究を通して、生徒自身がより良い気付きを生み出すために、日頃から授業のポイントを丁寧かつ明確に伝えることが大切になると感じた。また、練習時から試合をイメージして取り組むことができるような指導を心がけなければならないと思った。

「技能」の評価に関して、タブレットなどを活用し動画を撮影することで、授業後でも評価が可能となる。一回の乱取りのみではなく、複数の乱取りから生徒自身の評価とすることが、より良い学習評価につながると考えられる。また、乱取りでの評価のみでは、生徒は自分の得意技のみに頼ることが想定されるため、かかり稽古などにおいて、生徒が様々な技に挑戦している場面を見取ることで、効果的に評価することができると思う。

「思考・判断・表現」の評価においては、指導したポイントについて、生徒自身が感じ

たことや気付いたことを言語化したものをワークシートで評価することが適切である。また、自分だけでなく仲間の動きを観察し、気付いた点も積極的にワークシートに記入するよう促すことで、学びが深まるのではないかと考える。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して、練習や試合の中でどれだけ継続性をもって積極的に取り組んでいるかということが大切であると考え。その姿勢が、仲間への声掛けや安全上の配慮につながるのではないか。また、柔道という競技において、相手への敬意を払うことも大切な要素である。試合前後の礼法をしっかりと行うことは、競技の理解に大切な要素と考える。そのために、どのような声掛けをしているか、どのような姿勢で試合に取り組んでいるのかということをしかりと観察する必要がある。試合の中で評価を同時に行う場合には、タブレット等を活用し、試合の様子を撮影して評価の材料とすることも効果的である。

4 研究の成果と課題

今回の研究において、ワークシートでの評価のみで生徒の記入内容に大きな差を見つけることは難しいと考えられた。そのため、タブレット等を活用し、評価の観点に関するような発言が見受けられた時には、採用していくことも必要ではないかと感じた。普段の練習からお互いの技のかけ方や改善点をアドバイスするなど、工夫するよう促すことも必要であった。球技などと違い、客観的な数字等で生徒に違いを示すことが難しかったため、授業のはじめや次時の予告等で評価する内容を伝えることも必要であったのではと感じた。今後も授業実践を通して、生徒に安全でやりがいを感じさせることができる授業づくりをする中で、より適切な学習評価が実施できるよう研究を続けていきたい。

参考文献

- 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示） 平成 30 年 3 月告示 文部科学省
- 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 保健体育編 体育編
平成 30 年 7 月 文部科学省
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 【高等学校保健体育】
令和 3 年 8 月 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター
- 高等学校保健体育指導の手引き 令和 4 年 1 月 愛知県教育委員会
- 高等学校学習指導要領改訂における科目「体育」（入学年次の次の年次以降）の学習評価について 高等学校 保健体育
令和 5 年 3 月 令和 4 年度県立高等学校教育課程課題研究 保健体育研究班
- 高等学校の先生のための保健体育科授業づくりハンドブック
～授業設計力の向上に向けて～
令和 5 年 1 月 神奈川県立総合教育センター体育指導センター

令和5年度 県立高等学校教育課程課題研究

「保健体育研究班」 班員名簿

運営委員（班長）	愛知県立内海高等学校	校長	鈴木政之
運営委員	愛知県立三好高等学校	教頭	柘植知則
研究員	愛知県立名古屋南高等学校	教諭	鈴木公基
研究員	愛知県立江南高等学校	教諭	梶 邦彦
研究員	愛知県立津島東高等学校	教諭	荻久保吉隆
研究員	愛知県立稲沢東高等学校	教諭	小塚英晃
研究員	愛知県立豊野高等学校	教諭	北村 剛
研究員	愛知県立加茂丘高等学校	教諭	服部和茂
研究員	愛知県立豊田工科高等学校	教諭	船本章人
研究員	愛知県立三好高等学校	教諭	畑田浩次
研究員	愛知県立幸田高等学校	教諭	田中悠也
研究員	愛知県立国府高等学校	教諭	小林 雄

